

---

## 4 - 6 - 3 (ヨン、ロク、サン)

辰巳尚来

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

4 - 6 - 3 (ヨン、ロク、サン)

### 【Nコード】

N8815D

### 【作者名】

辰巳尚来

### 【あらすじ】

小学校からの二遊間コンビ、うっちゃんとこいちゃん。しかし、こいちゃんは女の子。公式戦出場を目指し、いや、甲子園出場を目指し、色んな手段で高野連に挑む！こいちゃんを認めさす事、そして自分たちも甲子園を目指す。うっちゃんの夢4 - 6 - 3のダブルプレーを公式戦で決める為！熱い一年が始まる。

## 第一章 もう一つの夢

もうひとつの夢

太陽が容赦なく照り付けるグラウンド  
クラブに球が収まった。

今年の夏、いや三年生の夏が終わりをつげた。

県大会3回戦で我が美香石高校は敗退した。

僕は二年生の宇梶隼人

幸運にもシヨートのレギュラーになり先輩達と甲子園を目指して戦えた。

高校野球をやってる人間の大半が願う事

それは甲子園出場。僕もその一人だ。

ただ、僕にはそれ以外にもう一つあった。

甲子園と言う夢の舞台で小学生からずっと二遊間を組んできた、こ  
いちゃんと4ー6ー3のダブルプレーを決める事。

「今日で三年生は引退する。最後にうちの伝統である新チームのキ  
ャプテンを三年生全員で決め、発表してもらおう」

監督がキャプテンの山根さんを促した

「では三年生全員で決めた、次期キャプテンを発表する。全員一致  
で、小泉に任せる事にした。」

キャプテンの言葉にみんながこいちゃんの方を向いた。

こいちゃんは困惑した表情をしていた。

「小泉たのむぞ！」

監督の言葉にこいちゃんはうなづき、僕達は拍手した。

美香石高校野球部、新キャプテン小泉三春の誕生だ！

そお、こいちゃんは女の子、だけどれっきとした野球部員。

こいちゃんとは小学校二年生から野球をやっている。野球が大好きで一生懸命だった。小学校も中学も高校も、僕たちと同じ練習をしてきた。

女の子だからと言う事は一切無かった。

それどころか、僕たち以上に野球を知ってるし、練習もした。

「うっちゃん、どうしよう」

「こいちゃんなら大丈夫や、みんな信頼してるよ。」「そうや、こいちゃんやったら大丈夫や！」

同級生のれんちゃん事、練田稔が言った。

「うん、頑張る。うっちゃんも、れんちゃんも協力してな」

こいちゃんは誰よりも野球が好きで努力する。だけど、高校野球の世界には高野連と言う伏魔殿みたいな所が女子は駄目だと決めている。

世界は21世紀になったが、高野連は未だに高校野球を健全の象徴  
と思ってる。

僕はただ、こいちゃんと公式戦にでて4 - 6 - 3のダブルプレーを  
決めたいだけなのに！

ある計画

僕たちは学校帰りにちよくちよく立ち寄る店がある。

「どんぐり」と言う喫茶店  
マスターが学生には優しく食べ物頼むとかなりの大盛で出してくれ  
る。

僕たちの定番はオムライスとカツカレー

「しかし、新チームのレギュラーどうなるかなあ」  
やまちゃん事、長身の山川光成が言った。

「そやなあ、三遊間はうつちゃんとなんちゃんて決まりやし、ピッ  
チャーは斉藤、外野は俺とやまちゃんと宮藤かな？」

あつくん事、大柄の阿久津唯一が持論を展開した。

「キャッチャーは？」

やまちゃんがオムライスをほっぽりながら聞いた。

「二年の井上がえんちゃんか、なあ、斉藤」

次期エースの斉藤はカレースプーンを舐めながら頷いた。

「ファーストは難しいなあ、セカンドはこいちゃんが一番ええねんけどな。」

やまちゃんの言葉にみんなが大きく頷いた。

「何か方法ないんか？」

れんちゃんが怒ったように言った。

「署名運動して高野連に乗り込むちゆうのはどうや  
やまちゃんの案に斉藤が冷静に答えた。

「あかんな、そんな事で変わるんやったらとっくに変わってるわ」

みんなが腕組みして考え込んでいた。

そこで僕はある計画を話した。

「マジでそれはいけるかもな」

みんなは身を乗り出して聞いていた。

僕の計画は、今人気のアイドル歌手、B6がやっているテレビ番組、  
学生を応援する事で人気のガッツで行こう

に手紙を出して、こいちゃんと言う存在を世間に知ってもらい、

味方にしてあの伏魔殿を粉碎する。

かなり影響力がある番組なので、万が一のチャンスがあるかも。

「うつちゃん、すごいなあ。さすが副キャプテン」

みんな、こいちゃんと試合に出たい気持ちは同じだった。

僕はみんなに、捕らぬ狸の皮算用を話し、やまちゃんはそれに対して、驚くほどの反応を見せた。

## 第二章 計画実行

### 計画実行

夏休みに入り、僕たち新チームの練習も気合いが入ってきた。

9時から3時までレギュラー取りにみんなが一生懸命だった。

うちの監督は守備の良さこそが最大の攻撃だと言う方針で、徹底的に鍛え上げられる。

こいちゃんも新キャプテンとして、毎日奔走している。

そんなある日、僕は監督に呼ばれた。

午前の練習の途中だった。

夏休みの職員室は先生方も少なく、ただ冷房だけが効いていた。

「宇梶、何かテレビ局に送ったやる？」

キタ！例の計画だ。やっぱりまずかったかなあ？

「ハイ、送りました。」

「お前、ナイスや！」

はあ？監督は満面の笑みで話しを続けた。



昨日、番組から取材の申し込みがあったらしく、校長に相談したところ、学校のピーアールになるからと大乗気だと言う事

そして、監督もこいちゃんの事を何とかせなあかんと思っていたらしく、かなり乗り気だった。

「来週に取材にくるそうや。上手い事いくためには、お前らも頑張らなあかんぞ」

こんなに早く取材が来るとは、ハガキを出した僕もびっくりだった。こいちゃんは、野球少女だけど決して男みたいな感じではなく、どちらかと言うと美人なタイプだった。

僕たちは昔からの野球仲間だから、恋愛感情はおこらないけど、校内ではかなりの人気があった。

テレビの企画としてはバツチりだと思っただけど…

「ほんまか、うっちゃん！」

やまちゃんが大声を出した。

昼ご飯の最中に、さっき監督に呼ばれた話しをした。

「こんなに早く来るとは思わなかったわ」

「うっちゃん、でかしたで」

れんちゃんも興奮ぎみに僕に言った。

話が見えない、こいちゃんだけが弁当を食べながらポカンとしていた。

「ねえねえ、何の話し？」

やまちゃんが、事の次第をこいちゃんに話した。

「ええ〜！マジでそんな事したの？」

こいちゃんは目を真ん丸にして僕に近寄ってきた。

みんなの気持ち話し、僕の夢を話した。

「そんなにみんなが思ってくれてたなんて、私…」

感激したのか、こいちゃんの目から涙がこぼれた。

僕もみんなもそれに胸がいつぱいになっていた。

いつも冷静な斉藤が、激を飛ばした。

「こいちゃんもお前らもこれからやで、テレビが来てあかん思われたら終わりやからな。」

この言葉にみんなは俄然やる気になった様子だった。

この夏休みは暑くなりそうな気がした

こいちゃん

こいちゃんと初めて会ったのは、小学校二年生のときだった。

近所の少年野球チームに入った時に彼女は居た。

元気いっぱい彼女は誰よりも野球を楽しんでいた。

小学生の間は試合にも出れたし、何の問題もなかった。

中学になると野球部入部は、かなりすったもんだしたが、先輩も同級生も小学校からの面子が多かった事もあり、何とか入部できた。

それからは、僕たちと同じ練習に必死についてきた。

そんな、こいちゃんをみんなは認め、信頼していた。

仲間に男も女も関係無い環境になっていた。

確かに、体力的に無理な部分は無きにしてもあらずだったが、短距離にしても長距離にしても、タイムは僕たちと変わらなかった。

人一倍練習し、センスがあったので、こいちゃんはチームでも守備の名手になっていた。

身長168センチ体重56キロスリーサイズは知らない。

男に混じって、硬球を操るこいちゃんは、僕たちの大事な友達で仲間だった

### 第三章 ガッツで行こう

ガッツで行こう

午前中の守備練習の時だった。

グラウンドにカメラを持った団体がやってきた。

監督が呼ばれて何やら話してる。

僕たちは、めっちゃめっちゃ気にしながら、練習していた。

まあ、カメラの向いているのは、こいちゃんの方だったけど。

監督が僕を呼んだ。

「こいつが宇梶です。」

監督が紹介したのは、人気アイドル、B6の山本君と緒方君だった。

カメラは僕に向けられ、二人のアイドルに質問されつつづけた。

いつもテレビで見えていたシーンを僕が演じていた。

彼らは僕たちの、こいちゃんへの気持ちを確かめ、こいちゃんのことを聞いた。

そして、一緒に夢を実現しようと言ってくれた。

僕たちにとっては、彼らは夢への掛橋だった。

次に、こいちゃんが呼ばれて、いざヒロインの出番となった。

最初は、僕も一緒だったが、後はこいちゃん一人で話していた。

「何の話してたんだよ。」

れんちゃんが、駆け寄って聞いた。

「いつもテレビで見てるやろ、あんな感じで、こいちゃんの事や、チーム事」

「うつつちゃん、テレビ写ったをか？」

「カメラは向いてたけど…」

れんちゃんの悔しそうな顔が、何だか面白かった。

昼ご飯の時、B6の二人も一緒に食べて話した。

さつきあれだけ悔しい顔していた、れんちゃんもさすがに緊張気味で、これまた面白かった。

二人は本当にいい人で、僕たちは彼らに惹かれ、信頼さえしかけていた。

こいちゃんも照れながらも、テレビ局のディレクターの注目に答えていた。

午後の練習はカメラが僕たちを、いや、こいちゃんを撮り続けた。

「上手くいくとええなあ」

斉藤が声をかけてきた。

「簡単じゃないと思うけど、上手くいくと信じてる。」

斉藤は大きく頷いた。

僕たちは、どうしても一緒に甲子園を目指したかった。

練習の後、みんなの話題は「ガッツで行こう」「の事ばかり。

誰が写っただ、誰と話しただなどといつまで言っていた。

こいちゃんは少し弱り顔だったが、さすがに女の子。

B6の二人と話した事に喜びは隠しきれなかった。

今年も夏の甲子園が始まっていた。

## 反響

例の番組が放送されたのは、夏の甲子園が盛り上がり出した頃だった。

強豪校が地方予選で敗退したため、本命なき大会だったが、無名の公立校の大躍進が世間の注目を浴びていた。

「昨日見たか。」

朝から、やまちゃんの鼻息は荒かった。

「ええ感じじゃったなあ」

れんちゃんはかなり写っていたので、上機嫌だった。

「放送終わってから、電話とメールが大変やったんやから」

こいちゃんが困り顔で言った。

確かに、僕も親戚や、小中の同級生から引っ切りなしに連絡があった。

「俺もすごかったは、えらい反響やな」

斉藤の言葉にみんなが頷いた。

あれから三回ほど取材はあった。

なんだか、カメラがある事に慣れた感じだったが、放送されたのを見ると、少し考える所もあった。

「昨日の放送はかなりの反響のようやなあ、朝から職員室も電話鳴りばなしや。あまり調子に乗らんと、沈着冷静にやれよ。」



監督の言葉に皆、気を引きしめた。

僕たちの計画は始まったばかりだった。

「うつちゃん、帰る時一緒に帰ってや。」

「なんで？」

「朝も何だか、いろんな人に声かけられる、一人は心細いねん」

確かに、こいちゃんは今や世間の注目物的や、何かあったら困るから、ガードは必要だった。

「わかった、一緒に帰つたるわ。」

練習中、何だかギャラリが多かった。放送の影響か、夏休みだと言うのに部活に関係ない生徒の姿があちこちにあった。

僕たちは練習試合が近い事もあって、より実践に近い練習をしていた。

一応、レギュラー組に僕もこいちゃんもいた。

新チームになってから、早一ヶ月、かなりいい形で来てるきがした。

練習の終わりに、監督がテレビ局から取材の一貫で、甲子園の決勝戦に四人連れて行きたいと、申し出があったと言った。

テレビ局からは、こいちゃんと僕が指名されているので、あと二人だった。

監督はじゃんけん決めてと言った。練習は休みの日だったので、その日は全員クリアだった。

短距離走で決めようとか、遠投で決めようとか、色々だが、最後はくじ引きで落ち着いた。

当たりを引いたのは、れんちゃんと斉藤だった。

やまちゃんの悔しがり方は凄まじいかった。

甲子園の決勝戦を見に行くのは、二年ぶりだった。

棚ぼたの話に、何だかワクワクしている僕だった。

## 第4章 夢見る熱気

夢みる熱気

B6との待ち合わせは甲子園の駅前だった。

僕たちは学校で集合してから、みんなで向かった。

決勝戦を見れる興奮と、テレビの撮影という緊張感で変な感じだった。

「俺たちに決勝戦見せてどないすんねん？」

れんちゃんの疑問に、斉藤が的確な答えを出した。

「こいちゃんと俺達が、目を輝かせて、興奮する姿が欲しいんやろ」

僕とれんちゃんは、なるほどとばかりに、大きく頷いた。

「決勝戦なんてなかなか見れないから、ええんちゃう。」

こいちゃんの言葉にも、二人で大きく頷いた。

待ち合わせ場所に着いた時には、すでにカメラは回っていた。

こいちゃんを中心に話しは進み、僕たちは甲子園のスタンドに座った。

夏の暑さと甲子園独特の熱気が、僕たちを興奮させた。

決勝戦は、古豪の広島、国領高校対、今大会のダークホースで世間に旋風を巻き起こしている。

佐賀、佐木北高校だった。

僕たちは、みんな普通に決勝戦を楽しんだ。

斉藤が言ったような、欲しい絵は何もしなくても撮れただろう。

劣勢だった、佐木北高校が土壇場で逆転した。

いやがおうでも、盛り上がる。

B6の二人と僕たちは、めっちゃめっちゃ興奮した。

佐木北高校の逆転優勝で、大会は幕を閉じた。

僕たちは、何が何でもここに来たいと思った。

緒方君が、みんながグラウンドで試合してる所が見たいと言ってくれた。

山本君は、4ー6ー3を決めよう。俺達も頑張る。と言ってくれた。

僕は、猛烈に感動した。

甲子園の近くで、最後に撮影をして、その日は終わった。

帰りの電車は、れんちゃんが興奮して喋りまくり、斉藤は、冷静に解説をし、僕は感動したと連呼した。

こいちゃんは、甲子園で試合がしたいと、叫んだ。

僕は、明日練習の前にこの感動をみんなに伝えて、勢いをつけようと思った。

### 練習試合

夏休みもあと一週間となったところに練習試合が組まれていた。

新チームになって初めての試合。

相手は、近くの同じ公立校の山塚高校。

当然、ガッツで行こうの撮影もあった。

「初試合や、思いきりやってこい」

監督から、スタメンが発表された。

僕は一番ショート、こいちゃんは、二番セカンドでスタメン出場だった。

撮影があるのを知ってか知らずか、ギャラリーが多かった。

先発の斉藤は調子もよく、すいすいと投げた。

打線は繋ぎに徹して、得点を取った。

B6の二人も興奮しながらの応援だった。

こいちゃんは、打撃ではヒットを放ち、守備では危なげないプレーを見せた。

もちろん、僕とこいちゃんの生きの合ったプレーもあり、テレビでアピールできた気がした。

試合は4対1で勝った。

ガッツで行こうのディレクターさんが、いい絵が撮れたと喜んでくれた。

僕たちは試合に勝った事と、うちの高校らしい試合ができた事に満足していた。

「ええ感じやったんちゃうか」

れんちゃんが満足げに言った。

「初試合にしては上出来やな」

斉藤も満足そうだった。

「楽しかったね」

こいちゃんは心から言った気がした。

「秋季大会に向けて頑張ろや」

僕が最後に意気込んだ。

夏休みも、もうすぐ終わり。今年も野球三昧だった。

## 第5章 ファンレター

ファンレター

二学期が始まると、僕たち野球部はちょっとした人気者になっていた。

ガッツで行こうの放送が何度かあり、それを見ていた奴らの反響は多きかった。

教室では、B6ってどんな感じだとか、サインもらってとか、ひどい奴はギャラでるんか?とか、質問責めだった。

一方では、こいちゃんの事を真剣に応援してくれる奴もいた。

校長は全校集会で、ことのいきさつを話し理解を求め、応援を要望した。

昼休みに監督から集合がかかった。

「これがお前ら宛てに来た」

テーブルの上には山積みされた、手紙があった。

「何ですか?」

「ファンレターや」

みんなはどよめき、自分宛ての手紙をさがした。



100や200じゃない量だった。

やまちゃんは自分宛てのファンレターに大興奮していた。

それはみんなも同じだった。

テレビの威力は凄まじく、全国には色々趣味の奴がいるものだ。

前回放送の練習試合でスタメンに出ていた全員にファンレターはあった。

「お前ら調子のんなよ！主旨を忘れるな！」

監督の忠告している時に、僕はひとつの考えが浮かんだ。

「監督、僕に考えがあるんですが。」

全員が僕に注目した。

ファンレター全部に返事を出す。それもちゃんとしたものを、そして、こいちゃんの応援をしてくれるように書く。

そうやって、全国にこいちゃん応援を広げていく。  
どうかなあ？

「そんなに上手くいくか？」

やまちゃんが言った。

「かなりええ考えやぞ、宇梶！お前、策士やな」

僕の考えは通り、具体的にどうするか話し合った。

文面はマネージャーの河合さんが考え、宛名書きはみんなで分担する事にした。

僕たちはしれているが、こいちゃんの数はかなりあるのだから。

やれる事は何でもやる。ここまで来たらね。

## 第6章 秋季大会

### 秋季大会

僕たちは日に日に有名人になっていた。

テレビ、雑誌、新聞、あらゆるメディアが、美香石高校野球部を取り上げ、高野連のルールに苦言をていしていた。

しかしながら、一行にルールが変わるような感じなく、秋季大会が迫っていた。

「大会まで二週間やで、何の動きもないなあ」

「れんちゃん、そんな早くに結果はでえへんで、来年の夏までにでたらええねん」

「うっちゃんの言う通りや、あせるな。」

いつも斉藤は冷静だった。

確かに、盛り上がりはあるが、現実何も実益はなかった。

これからが、どうするかだ。

秋季大会に向けて、練習でもレギュラー組のセカンドは、一年の安井誠が入っていた。

決して下手ではないが、まだまだって感じではあった。

ファンレターの返事はかなりの効果を生み、全国での盛り上がりに一役買っていた。

「こいちゃん、秋季大会は間に合わないけど、来年には…」

「うっちゃんありがとう。公式戦には出たいけど、今でも何の不満もないよ」

こいちゃんはキャプテンとして、チームを引っ張っていた。

チームは夏から、確実に成長していた。

斉藤は秋季大会注目の右腕として、評価が高かった。  
この大会を頑張って、より注目を集めれば、先が見えるかもしれない。

連勝と不安

秋季大会が始まった。

我が美香石は、周りの応援のおかげもあり、連勝した。

斉藤は下馬評通りのピッチングを見せ、打線は繋いで繋いで、得点をした。

元々、守備には定評があるチームなので、そのあたりは、そつなく

熟していた。

ガッツで行こうも盛り上がっていた。

毎試合、B6の誰かが応援に来てくれていた。

「うっちゃん、不安無いか？」

れんちゃんがいきなり聞いてきた。

「何がや？」

「北川や、少し守りのリズムが悪いと思うねん」

確かに北川は、この大会になって、あまり守りのリズムは良くなかった。

ハンブルや悪送球があったし、連携もタイミングが合わない事があった。

「まあ、一年やし、徐々に上がるわ」

連勝中のうちにとっての唯一のウィークポイントではあった。

明日はベスト16の掛かった試合。

強豪、神栄高校。これに勝てるば、うちの實力はかなりのものだ。

「うっちゃん、次の資料。エースはかなり手強いよ」

こいちゃんは相手チームのデータをまとめてくれていた。

「斉藤の調子もええし、井上も当たってきてる。行けるで、次も」  
スコアラーとしてベンチに入るこいちゃんは、対戦相手のデータをきっちり調べていた。

誰より野球が好きで、こいちゃんは、野球を誰より知っていた。

僕たちは一戦一戦と、自信をつけていた。

## 衝撃の九回

### 衝撃の九回

神栄高校との試合は、何時も以上に気合いが入っていた。

斉藤はこの大会で、一番の調子だった。

さすがに、神栄のエースもなかなかで、僕たちは凡打の山を築いていた。

0対0のまま六回表のうちの攻撃を迎えていた。

「うっちゃん、外の真っすぐは捨てて、スライダー狙いで。」

こいちゃんから指示が出た。

でも、神栄のエースのスライダーは相当なものだった。

「大丈夫、うっちゃんなら打てるから！」

僕は大きく頷き、打席に向かった。

確かに左バッターの僕には、外の真っすぐは手が出なかった。ならばスライダーをとばかりに、思いきり振り抜いた。

詰まった打球は大きくバウンドし、ピッチャーの頭を越え、センタ

ーへ抜けた。

スタンドの大歓迎が心地よかった。

ベンチからは初球盗塁のサイン。

こいちゃんのデーターを思い出し、牽制の時の癖を見た。

牽制の時は左足首が伸びる。

一回牽制の後、次はない。

僕はバッチリのスタートを切った。

余裕のセーフ。二番に入った、あっくんが送りバンドを決めた。

ワンアウト三塁、バッターは三番、井上。

今大会、バッティングは絶好調だった。

スクイズ警戒するバッテリ、僕は三塁で挑発気味にリードをとった。

イライラしているのが、手に取るようにわかった。

そして、ワンツーからの四球目、井上は快音を響かせた。

打球は左中間を深々と破った。

僕は手を叩いてホームインした。



待望の先手点、四番の斉藤も続き、この回二点を取った。

ベンチの盛り上がりはマックスだった。

斉藤は疲れたを感じさせないピッチングで八回まで無失点に抑えていた。

このまま勝てると思った九回、ドラマは待っていた。

先頭バッターに二塁打を打たれ、続くバッターに送られ、ワンアウト三塁。

勝ちを意識した、斉藤はリズムが乱れていた。

次のバッターにはフォアボールを与えた。

同点のランナーを出した。

「ダブルプレーで終りや、まかしたで。」

僕は斉藤に声をかけた。

そして、三球目、斉藤の殿下の宝刀チェンジアップに完全にタイミングを狂わされた打球は、セカンド向かって転がった。

「ゲッツーや！」

大きな声がかかった。

僕は二塁ベースに向かって走りだした。

これで終りと思った瞬間、  
セカンド北川のグラブからボールがこぼれた。

焦った北川は、ボールを拾い慌てて二塁に投げた。

送球はホーム側に流れた。

僕は必死でボールを取り、一塁へ投げようとした瞬間、ランナーと交錯。

ボールはコントロールを失った。

「セーフ」

一塁塁審の無情のコール。スタンドの悲鳴と歓声。

そして、僕は右足の激痛に倒れこんだ。

三塁ランナーがホームに帰り、2対1

「うっちゃん、大丈夫か」

れんちゃんが駆け寄って来た時には、痛さで何も答えられなかった。  
ランナーと交錯した時に、足首を捻り、おまけにスパイクされていた。

僕は交代を余儀なくされた。

その後、斉藤は打たれさよつなら負けをした。

## 第8章 山が動く

山が動く

敗戦の後、悔しいさはあつたけど、落ち込む事はなかった。

僕たちは、あそこまで戦えた事に自信を持ち、これからもっと強くなるにはどうするかを考えていた。

一方で、衝撃的な負けをテレビで見た世間の人達は、あの時のセカンドが、こいちゃんだったらと、スポーツではありえない、たらればの話で盛り上がっていた。

「うっちゃん、ケガ大丈夫か？」

れんちゃんが練習前に聞いた。

「幸い骨は何とも無かったから、二週間の辛抱やな」

あの時のケガは、右足首の捻挫にスパイクされた時の裂傷で、全治2〜3週間と言われた。

エラーした一年坊主は落ち込んではいたが、誰も責めるような奴はいなかった。

「全員集合！」

監督がみんなを集めた。

「今、テレビ局から電話があった。この間の試合以降、全国で署名運動が起こって20万もの署名が集まったそうだ!」

テレビの力は恐ろしい。僕たちが集めても、千人くらいが関の山。それが20万とは凄い。

「そこで、それを持ってテレビ局と我々で陳情に行く」

いよいよな感じがした。

監督とこいちゃんと僕が行く事になった。

「来たな、うっちゃんの作戦が実を結ぶ時が」

斉藤が珍しく興奮していた!

いや、みんなも何だか興奮気味だった。

「明日、放課後に行くから準備しとくように」

僕はやっとスタートラインに立てたきがした。

翌日、僕たちはテレビ局の車で伏魔殿に向かった。

山本くんは僕たち以上に興奮していた。

車内で、大学教授でもあり、スポーツライターの山之内智也さんを紹介された。

今回のオブザーバーとして参加してくれるらしい。

ディレクターさんから、色々説明があった。

20万もの署名が集まったと言う事の他に、マスコミの取上が多い事、そして、今年の春に大ニュースになった、特待生問題で少し変わりつつある今がタイミングとしていいと言う事。

タイミングどうのこうのは僕にはわからなかったが、陳情出来るだけでも大きな第一歩だと思っていた。

車が伏魔殿に近づくと、そこには、大勢の人達とマスコミが集まっていた。

「うっちゃん凄いな」

こいちゃん言葉に僕は頷いた。

僕たちが車を降りると、大歓声が怒った。

緊張の面持ちで中に向かった。

僕は松葉杖を就いていたので、こいちゃんに支えてもらいなが階段を上がった。

中に入ると、すでに待ち構えていた、広報担当者が部屋まで案内してくれた。

そして、現れた会長だか理事長だかに、僕たちは思いをぶつけた。

ディレクターさんが経緯を説明して署名を渡した。

僕は真剣に自分の言葉でお願いし、こいちゃんは野球が好きで試合に出たい気持ち話を話した。

監督はこいちゃんが本当にいい選手であることを、山之内先生は現状の女子のデータを出し、体力面など男子と差がなく、女子が男子の中でやっていけると演説をうった。

相手の反応はまずまずだと思った。

外に出た僕たちを、多くの人達が待っていた。

来た時はそんなに思わなかったけど、やたら恥ずかしい気持ちになった。

その日のニュースで陳情の場面が流れた。

さすがに、松葉杖でこいちゃんに支えられながらの僕は痛々しく思えた。

これもテレビ局の作戦なんだろうなあと思うとやっぱり恐ろしいと思った。

これがどうなるかはわからなかった。

ただ、検討しますと言ってくれた事を信じるしかなかった。

## 第9章 クリスマスプレゼント

クリスマスプレゼント

あれから何もなく、一ヶ月以上が過ぎた。

僕の足も治り、練習も再開していた。

「クリスマスどうする？」  
れんちゃんがみんなに聞いた。

野暮な話しをするもんだ。

僕たちの中で、彼女が居ないのは、れんちゃんとおっくんと僕だけ。

「何もないよ」

「寂しいなあ、高二のクリスマスに何もないなんて」  
まさか男三人でクリスマスパーティーでもやるうと言っくんじゃない  
だろなあ。

「カラオケでも行くか」

来た！やめようよ、れんちゃん。

「よお、寂しい三人。」

野球部一のモテ男、斉藤が話しに入ってきた。



「別に寂しい訳やないで」  
「明らかな負け惜しみだった。」

「男三人でクリスマス過ごそうなんて考えてへんやろなあ」

斉藤の言葉が三人を突き刺した。

「そんな訳ないやろ」

今さつきカラオケに行こうと言っていたはずの、れんちゃんが斉藤に言いかえした。

「まあ、17歳のクリスマス楽しめや」

こう言う時のモテ男、斉藤はむかつく！

確かに ガッツで行こうに出て以来、何人かの女の子から告白された。

でも、それに両手を上げて答える事は出来なかった。  
クリスマスまであと少し、家でゆっくりかな？

そんな事を考えていると、監督が猛然とこっちに走ってきた。

「お前ら、まだおったか、今さつき電話があって、伏魔殿が小泉の一件で専門調査会を作ったそうや」

監督は興奮していた。

僕たちも最初は意味がわからなかったけど、監督の説明に改めて歓

喜の雄叫びをあげた。

「こいちゃんは試合出れるんですか」

「まだや、ただしかなりの前進や！来年三月には結論を出すそつや」  
何だかアドレナリンが上がってる感じだった。

七月にハガキを出して、5ヶ月足らずでここまで来たか。

まだ、試合に出れる訳ではないが、かなり前進した安堵感があった。  
彼女からクリスマスプレゼントをもらえない僕にとっては、この話  
しはまさに、クリスマスプレゼントだった。

「うっちゃん、甲子園行くぞ。こいちゃんも一緒に」  
れんちゃんという言葉に大きく頷いた。

こいちゃんも知らせを聞いて興奮気味だった。

テレビの放送があつてからは、必ず誰かが、こいちゃんと一緒に帰  
る事になっている。

大体が僕かれんちゃんかやまちゃんだ。

「こいちゃん一歩前進やな」

「ありがとう、うっちゃんのおかげやわ」

今日はれんちゃんもやまちゃんも「どんぐり」に寄ってくるので僕だ

けだった。

「うっちゃんクリスマスは？」

「何もあるわけないやん」

「こいちゃんまでそこいじるか！」

「こいちゃんこそ、どないなん？最近は何氏のかの字もないな」

「野球やって勉強やってたら、恋愛の時間ないわ」

確かに、恋愛の時間はない。と言う事にしておこう。

中学の時にサッカー部の和田明正と付き合ってから、彼氏らしき男の影はない。

結構モテるはずなんやけど。

「うっちゃん、いつから彼女おらへんの？」

「高校入ってから」

「寂しい奴やなあ」

それはお互い様やで。

「結構、最近モテてるやろ？」

「モテても彼女が出来るのは別やで」

僕は身長178センチ、体重75キロ

確かに男前ではないが、ブサイクでもないと思う。

中学の時に付き合ってた彼女には、「やさしすぎるだけじゃ」と言われフラれた。

「うっちゃん、イブの日に映画でも行くかい？」

「かまへんけど、こいちゃん本間に何にもないんか」

無理して寂しい17歳に愛の手を差し延べてくれているのではないだろうか。

「買い物も行きたいねんけど、さすがクリスマスと一緒に行ってくれる女子高生は少ないから…」

あっ！そういう事ね。今や有名女子高生のこいちゃんは、なかなか一人では買い物もしにくいのは確かだ。

「OK！何見に行くか決めといてな」

今年の冬もいつもと同じ寒さになりそうだ。

## 第10章 暖かい気持ち

暖かい気持ち

クリスマスイブイブとイブは練習は休みになった。

イブイブはれんちゃんとあつくんとカラオケでストレス解消した。

寂しい三人が集まった訳じゃなく、せつかくの休みを楽しもうとしたら集まった三人なのだ。

街はクリスマススムード一色だったけど、それをものともせず三人で楽しんだ。

ただ、明日は三人で会うのはよそうと決めていた。

まあ、僕はいちゃんのボディガード的な買い物があるしね。

イブは午前10時に待ち合わせをした。

公開したてのアクション映画を見て、昼ご飯にお好み焼き屋に入っ  
た。

「うつちゃんはいつもモダン焼きやな」

「ボリリュームあるし、そばもお好みも両方食べれるからね」

二人で映画の内容や色々な事を話しながら、お好み焼きを食べた。

はたから見れば彼氏と彼女に見えるかも？

しかしながら、当人達はまったくもってそんな感じはない。

こいちゃんの買い物は、やはり女の子と言う感じだった。

洋服に小物、迷いすぎだよと思いつながらそれに付き合った。

意外と楽しめた。

「うつつちゃん、お茶でも飲めか。買い物付き合ってくれたお礼におごるから」

僕達はスタバに入った。こいちゃんは抹茶ソイラテ、僕は本日のコーヒーを頼んだ。

何となくコーヒーをブラックで飲む事が大人っぽい感じがして、カッコイイ気もした。

「うつつちゃんありがとうね。」

「どうせ暇だし、誘ってくれてよかったわ」

「違うよ！今日の事じゃなくて、ガッツで行こうの事」

こいちゃんは、僕に今回の色々を感謝し、今まで野球をやっていたよかったですと言った。

「僕はな、テレビや色んな所で言った事は本心やねん。こいちゃん  
とずっくと野球やってきて、ほんまに思う事や」

つつい熱弁して恥ずかしくなってコーヒーをぐつと飲んだ。

熱さでびっくりして涙が出そうになった。

「うっちゃんの気持ちほんまにうれしい。目潤んで言うてくれるな  
んて」

いやいや、これは違うんだけど…

恋愛話しやったら大成功やけど、この場合は恥ずかしいだけや。

「これ、クリスマスプレゼント」

こいちゃんが紙袋を僕にくれた。

思いがけない出来事に戸惑った。

「え、ええの？」

中味はマフラーだった。

「手編みちゃうけどね」

手編みとかそうじゃないとか関係なかった。

おふる以外から貰うクリスマスプレゼントにかなり興奮していた。

「僕、何にも用意してないは、ゴメン」

何て気の利かない男何だろうと、情けなくなった。

今日はクリスマスイブ。恋人同士だろうがなかつが、この日に異性と会うのにプレゼントぐらい用意するのが常識だろう。

こいちゃんの笑顔を前に僕はかなりへこんだ。

来年も彼女はできないだろうと悟ったイブだった。



## 第11章 誓いの手袋

### 誓いの手袋

歳が開けると一月はあっという間に過ぎた。

体力作りと筋力アップに重点を置いた練習をしていた。

ガッツで行こうの放送もあまりなく、世間の話題も変わりつつあり、何だか不安だった。

時節、春の選抜高校野球の出場校が発表になった。

もちろん、僕たちには関係無かった。

しかし、練習試合の申し込みは、日に日に増えて監督はうれしい悲鳴をあげていた。

「今月から週二試合づつやっていく。春季大会に向けて実戦を通して鍛えていく」

監督は僕たちに気合いをいれた。

秋季大会以降は試合がなかったから、ワクワクしていた。

敗戦の後、僕たちはかなり考えて練習してきた。

長所は伸ばし、短所は徹底的に治した。

一年生達もかなりレベルを上げてきた。

本気で夏を目指していた。

練習試合が決まってほどなく、ガッツで行こうの取材も始まった。

僕たちは予想以上に力をつけていた。

特に斉藤と井上は凄くなっていた。

練習試合の前にB6の山本君がやってきた。

いつものスタッフは誰も居ない。

テレビの撮影はなく、個人的に僕たちを尋ねてきた。

山本君は僕たちを真剣に応援してくれている。

気さくに言葉をかわし、笑顔いっぱいで見守ってくれている。

「今日はテレビとは関係なく、個人的にプレゼントを持ってきました」

僕たちの前に真新しい手袋があった。

そののっぴに刺繍がしてある。

名前の他に「夢」の一字。

山本君の気持ちにみんな感動していた。

練習試合はハードスケジュールで行われたが、それを難無くこなす結果を出していた。

春の選抜高校野球も始まりっていた。

僕たちは春季大会にむけ練習にも気合いが入っていた。

少しずつ暖かい日が増えていた。

## 第12章 春の嵐

### 春の嵐

桜が咲きだした4月、我が美香石高校野球部にも新入生がやってきた。

テレビの影響はかなり大きく、例年20人前後の新入生が入ってくるのに対して、今年はなんと60人も入ってきた。

女子マネージャーにいたっては一学年2名の定員に対して40人もの新入生が来た。

ミィハー気分の生徒も多く、長く続くとは思わなかった。

僕たちは新入生の事よりすでに始まっている春季大会で頭はいっぱいだった。

公式戦に初めてスタメン出場した女子選手は、世間の話題をかつさらった。

おまけに試合は、斎藤の完封劇に加え打線は大爆発でのコールドゲーム。

美香石とこいちゃんの名前は改めて世間の知る事となった。

僕たちは順調に勝ち進み、なんと決勝まで来た。

学校はかなり盛り上がり、ガッツで行こうも特番を組む事態になっ

ていた。

「いよいよ決勝やな」

れんちゃんがオムライスをほうばりながら言った。

「ここまでこれるやなんて、冬場頑張った成果やな」  
やまちゃんが感傷に浸っていた。

「齋藤君のおかげやと思うよ私は」

こいちゃんが冷静に言った言葉にみんなが頷いた。

齋藤は秋からめきめきと成長し、ストレートは150キロ近くになり、得意のチェンジアップに加えてスライダーの切れが抜群に良くなった。

今やプロが注目する一人になった。

「これで俺らは近畿大会に行けるんやんなあ」

れんちゃんの一言にみんながはっとした。

県大会の3位までが次の近畿大会に出場でき、夏の予選のシード校に選ばれる。

「こいちゃんはどうなんの？」

あつくんがコーラを一气飲みほして言った。

今回の公式戦出場は県大会のみの実験的特例だった。

と言う事は次の近畿大会にはこいちゃんは出れない。

「どんぐり」にいた全員がそれに気付いた。

「私は県大会に出れただけで満足してるよ」

「それではあかん！県大会止まりやったら、夏も勝っても甲子園行かれへん」

僕の勢いにこいちゃんは目を真ん丸にして驚いた。

「うつちゃんの言う通りや、県止まりじゃ意味ない」  
斎藤もまた、勢いよく言い放った。

みんな考える人の様に黙った。

僕たちが頭を抱えている頃、大人達もその事で動きだしていた。

美香石高校としては初の決勝進出。

30人から一気に100人に膨れ上がった野球部

この半年で環境は目まぐるしく変わり、それに比例するかの様に僕たちも強くなった。

こいちゃんがスタメンでセカンドに居るのが当たり前になっていた。

決勝は持てる力の全てでぶつかった。

相手は強豪、報国学園。

甲子園の常連校で今大会も左腕の山崎を要して勝ち上がった来た。

我が美香石も斎藤と大会No.1の守備力でそれに対抗。守備力に加えて打撃もかなり向上していた。

現に僕ですら、今大会先頭打者ホームランを含む3ホームーを放っていた。

話題のこいちゃんは打率が4割を越え、犠打に関しては100%の成功だった。

しかしながら、甲子園を何度も経験している報国学園はうちより一枚も二枚も上手だった。

試合は相手のペースから抜け出せずに3対1で敗れた。

試合後、監督から近畿大会でのこいちゃんの処遇について話があった。

結果は近畿大会出場はダメだと言う事

しかしながら夏の大会に関してはは考慮し検討するという事だった。

僕たちは少し不満を感じた。

しかし、この春の美香石の旋風はすでに春の嵐の様に世間を巻き込んでいた。

## 第13章 レギュラー争い

レギュラー争い

初出場の近畿大会は対戦相手の格の違いに圧倒されながら、斎藤の踏ん張りや井上の活躍で何とか三回戦まで進めた。

結果は敗退。

夏に向けて着実にステップアップしている気がした。

新入生が入って一ヶ月がたち、60人から早くも40人に減った。

しかしながら、人が多く入ったと言う事はそれだけいい人材に出会える確率も増えたと言う事

一年生の何人かに即戦力になりそうなのがいた。

すでに上級生の僕たちと練習している一年生もいた。

監督としては喜ばしい事だが、僕たちにとっては死活問題。

レギュラー組も、うかうかはしてられなかった。

内野手でなかなかいい奴がいた。

監督は夏に向けてレギュラー争いをさせて、チーム力を上げようとしているみたいだった。

「うつつちゃん、なかなか一年豊作やな」



「確かに、ええのおるわ」  
今や大エースの斎藤だけは安泰って感じだった。

「うかうかしてたらレギュラー取られわ」

「うつつちゃんは大丈夫や」

お世辞でも嬉しかった。

しかし、現実はかなり厳しく、練習試合では僕をはじめ、こいちゃんもれんちゃんもスタメン落ちする事が多かった。

昨年に比べればチーム力は圧倒的に上がっていた。

それは結果が証明している。

話題先行のチームだった半年前とは何もかもちがっていた。

レギュラー争いは練習をハードさせていた。毎日、みっちりやっていた。

入りたての一年生にはさぞきつかった事だろう。

こいちゃんもレギュラー争いに必死だった。

守備力はぴか一だけどやはりバッティングは非力が災いしていた。

こいちゃんの手の平は女性とは思えない豆だらけだった。

れんちゃんはここ数カ月で身体がひとまわり大きくなった。

皆がレギュラー取りに必死だった。

そろそろ汗ばむ日が増えてきた。

夏の予選は刻々と近づいてきていた。

こいちゃんの県大会以降の出場については今だ進展がなかった。

ガッツで行こうもかなり色んな方面からアプローチをかけていたが、成果はなかった。

大人達の奔走の中、僕たちは何をすべきか悩んでいた。

そんな時にシンポジウム開催の案内がきた。

「高校野球シンポジウム」

主催は伏魔殿だった。

「これってなんなん？」

れんちゃんの疑問は当たり前前だった。

「討論会みたいな感じちゃうか」

斎藤の言ったことがほぼ正解のようだった。

パネラーには元メジャーリーガーや甲子園を沸かした選手の名前があった。

なんだかんだと昨年は特待生問題でこたついてイメージ悪くなっただけに、色々策を練っているのだろうか？

僕たちもそこに付け込んでこいちゃん問題を何とかしようと思っ  
ていた。

シンポジウムは監督を含めて10人で行く事になった。

何だかのきっかけになればいいと思っていたが、現実はいちちゃん  
の甲子園出場は難しい状況にきていた。

県大会の出場を認めただけでもかなりの譲歩だと思ってるに違いな  
い。

シンポジウムには子供から大人まで色々な人達が来ていた。

壇上ではパネラー達が高校野球について語り合っていた。

確かに面白い話しではあったが、女子選手についての話しは全くな  
かった。

シンポジウムの後半に来場者からの意見を聞く時間があつた。

僕たちも手を挙げて機会をまっただが、まったく相手にもしてもらえ  
なかつた。

ところが、ひとりの小学生が驚く質問をした。

その小学生はなぜ女子がだめなのかを質問し、自分の意見まで言っ  
てのけた。

場内は驚き、壇上は浮足だった。

パネラー達はよく言う台詞を並べ立てているだけで、その小学生が納得出来るものではなかった。

会場からは、やじめいた言葉も飛び交い、ざわついた雰囲気になっていった。

それを静めるべく、伏魔殿の代表が前向きに検討している事を連呼し、県大会までに結論を出すといった。

小学生は最後に力があるものがレギュラーになれる、だから野球は楽しい男も女も関係ないと締め括り、会場は拍手喝采で幕を閉じた。

シンポジウム終了後、僕たちはあの小学生を探した。

マスコミ陣が彼を取り囲み取材をしているのを見つけ、僕たちは駆け寄った。

こいちゃんは我慢できず、取材の輪に割って入り、彼を抱きしめてお礼を言った。

彼は照れ臭そうにしながらも、こいちゃんにエールを送った。

彼の名前は坂本タケルくん、小学五年生だった。

もちろんガッツで行こう見てくれて応援してくれてる一人だった。

彼も僕と同様に幼なじみで野球をしている女の子がいるらしい。

でも、色々な弊害で悩んでる姿を見ているので、今回の事は他人事に思えないようだった。

こいちゃんと僕たちは、必ず甲子園出場してみせると約束をした。

## 第14章 夏本番

夏本番

予選が始まった。僕たちは完全武装で試合に望んだ。斎藤をはじめ、レギュラー組は春から大きく成長していた。

もちろん、こいちゃんもだ。

春同様に県大会には出場が許されている。

予選までには結論を出すと言った伏魔殿はいまだに何の解答も示さなかった。

ガッツで行こうとも一年の付き合いになり、僕たちも取材だからと緊張せずに自然体でいられようになった。

山本君と尾形君が激励に来てくれ、みんなの夢を必ず実現しようと強く言ってくれた。

美香石高校はシードなので二回戦からの登場だった。さすがに昨年とは違い、1番の注目を集め、かなりマークされていた。

しかし、エース斎藤は今や今年のドラフトの目玉になったその実力は群を抜いていた。

打線も井上やれんちゃんに長打力が付き、1番の僕が出て2番のこいちゃんが送り、クリーンアップが帰す。

このパターンで勝ち上がった。

周りの期待通りに予選を勝ち進んだ。

ガッツで行こうも特集番組で盛り上げてくれた。

すでに準決勝までコマを進めていたが、問題は全く何も進展していなかった。

「一体何時になったら答えがでるんや！」

「れんちゃんの言う通りやで、予選までに結論出すって言ったんぢやうか」

チームのみんなはイライラしていた。

「多分俺らが負けるの待ってるんやろ」

斎藤の言葉にみんな奮起した。

「負ける？俺らが負けるってか？絶対負けたらへん！こいちゃんと甲子園行くまでわな。」

山ちゃんの言葉にみんなは賛同し、団結はより強固になった。

「みんなありがとう、今で十分幸せやけど、ここまで来たら甲子園で野球がしたい。」

こいちゃんが初めて素直に気持ちを言った。

世論の風当たりもきつくなりはじめ、負けると思った僕たちは準決勝まで来ている。

何だかのアクションを起こさなければかなりのマイナスイメージに成り兼ねない。

決勝に進んだらいやがおうでも何かするだろう。

僕たちはただ甲子園を勝ち取る為、少しでも長くこのメンバーと野球をする為に全力で行くしかなかった。

準決勝はさすがに苦戦した。試合をするたびに観客は増えていた。

斎藤も連投の疲れがでてきていた。

試合は相手のペースで進み2対0で美香石を向かえていた。最後の攻撃を

八番の二年生前田からの打順、気負った前田はキャチャーフライ。

続くあつくんは必死の形相で相手に挑み、フォアボールを選んで塁に出た。

そして僕も何とか繋ごうと策を巡らし、ゲッツーだけは避けたい所なので、一塁ランナーのあつくんとアイコンタクトでエンドランを選んだ。

スタートを切ったあつくんに釣られてショートが動いた。



僕は得意の流し打ちで三遊間を抜いた。

ワンアウト一三塁、バッターはこいちゃん！

満塁策をとってきてもおかしくはない場面だが、後の井上は当たっている。

一三塁でのスクイズは難しい。

ベンチからのサインは盗塁、三塁ランナーが足の早いあつくんだったのであわよくばダブルスチールの考えだった。

僕は初球からスタートを切った。

さすがにキャッチーは投げて来なかった。

セオリーなら塁を埋めてダブルプレイ狙いが得策かもしれない。

九回の裏ワンアウト二三塁、バッターは非力なこいちゃん。

相手はこいちゃんとの勝負に出た。スクイズのサインは出ない！

僕もあつくんもピッチャーを揺さぶるべく大きくリードをとった。

こいちゃんの緊張は二塁ベース上の僕まで届いていた。まだ、スクイズのサインが出た方がましだろう。

監督のサインは“打て！”

ここまで来れたのはこいちゃんと言う存在が大きかった事は間違いない。

全てをこいちゃんに賭けた！

練習試合だけでは味わえないこの公式戦ならではの感覚を初めて味わっているだろう。

頑張れ、負けるな、甲子園はすぐここまで来てるんだから！

初球ボールの後は、ストライクでワンエンドワン。

一点でも取れば、次は井上だから同点のチャンスは大きくなる。

相手も一点で抑えればいいと思っっているだろう。

三球目、カーブだった。

こいちゃんはバットを思いっきり振った。

快音と共に打球はレフトの上がった。

俺はハーフウェイで打球の行方を追った。

大きいぞ！

まさか！

レフトの選手がさがって行く。

「入れ〜！」

ベンチかられんちゃんが叫んだ！

ボールはレフトスタンドに吸い込まれた。

逆転さよならスリーランホームラン！

「やった！」

目をうたがう様な光景だった。こいちゃんがホームランを打った！

小学校から10年以上も一緒に野球をやってきたけど、初めて見た！

ホームインした僕はあつくと抱き合い、振り向いてこいちゃんを見ると、まさに放心状態で三塁を周ってきた。

みんなはホームベース上で帰ってくるのを待った。

「ホームイン、ゲームセット」

スタンドの大歓声の中、僕達はこいちゃんを祝福すべく頭を叩いた。

「こいちゃん、ナイバツテイング！すごい！」

「よう、打った！最高や」

「かつこよすぎやで」

みんなが次々に声をかけた

最後の挨拶に並んだ僕達の顔はみんな満面の笑みだった。

あとひとつ。ドラマティックな夏やね。

試合後、山本君と尾形君が興奮してやってきた。

「凄いよ、こいちゃん、感動した。」

山本君はそう言うときいちゃんの頭を何度も何度もなでた。

こいちゃんも恥ずかしがりながらも、うれしさはその顔を見ればわかった。

「これだけ活躍して、甲子園出れません絶対は無いと思うよ」

尾形君が力強く言ってくれた。

確かに、これだけ頑張ってダメだなんて考えられなかった。

僕達の興奮は試合後収まることはなかった。

## 第15章 正念場

正念場

準決勝から事態は一変した。あまりにドラマティックな幕切れに世間は狂喜乱舞の様相だった。

こいちゃんの実力はこれで証明された感があった。

マスコミの騒ぎぶりは以上な程だった。スポーツ紙の一面はこいちゃん一色だった。

決勝へコマを進めた美香石高校

あとは、伏魔殿がどんな判断をするのか、それだけが心配だった。

「ここまで来たお前らを褒めてやる。しかし、ここまで来たら勝取って来い！甲子園行くぞ！」

監督の力の入った言葉に僕たちは大きく返事をした。

「私達は強くなった。でも、もっと強くなれると思う。みんなで思いつきり野球しよ」

主将らしくこいちゃんがみんなに激を飛ばした。

決勝の相手は昨年の優勝校、報告学園。相手は強敵だった。

そうそう簡単に行く相手では無い事は想像できた。

夏の暑さは半端なく、それにもましてスタンドの応援は地方大会とは思えないくらいにヒートアップしていた。

予想は大会屈指の好投手の投げあいかと思われたが、やはりお互い連戦の疲れは隠せず乱打戦の様相を見せていた。

一回からお互いに点の取り合いになった。美香石は絶好調の打線はいつもの繋がりで得点を重ねた。

報告学園も斉藤の立ち上がりを攻めて得点をあげていた。

「しっかり守っていけよ！相手のペースになるな」

監督も決勝戦の難しさを実感してるようで、熱くなっていた。

五回まで4対4の同点。斉藤は幾分持ち直してはいたがまだまだ不安定なピッチングが続いていた。

準決勝のホームランで気を良くしたのか、こいちゃんは絶好調でヒットを量産していた。

僕自身も調子よくリードオフマンとして相手をかく乱していた。

七回、チャンスはやってきた。れんちゃんの下二塁打の後にやまちゃんが続ぎ1点をあげた。

そこ後も連打でこの回に3点を取った。

斉藤も最後の踏ん張りで力のある球を投げ続けた。

徐々にヒートアップする応援団！僕達の甲子園を意識し始めた。

自分に平常心と言い聞かせながら九回の守りに着いた。

色々あった一年間だった。甲子園と言う夢ともう一つの夢、こいちやんと甲子園で4 - 6 - 3を決める

ガッツで行こうと出会い、そして色んな努力。

最高の仲間と過した野球生活もこの回で終わってしまうか、それとも夢の甲子園とうご褒美をもらえるか、

斉藤は落ち着いているように見えた。こいちゃんは何だかそわそわしていた。

「こいちゃん、落ち着いていこう！」

「うっちゃんは冷静やなあ、心臓が口から出そうやわ」

決して冷静ではなかった。ただ、冷静を装ってただけだった。

先頭バッターを必死に食らいついてきたが、気迫は斉藤が勝った。

「ワンアウト、ワンアウト」

あと二人！

祈る様な応援の中で僕達の呼吸は自然と荒くなり、鼓動はびっくり

するくらい早くなっていた。

続くバッターにはセンター前に運ばれた。

「ドンマイ、ドンマイ。ゲッツーで決めるぞ！」

れんちゃんが斉藤を激励した。

斉藤が僕に向かって、次いくぞとばかりにグラブで僕を指した。

セツトアップから斉藤は冷静なピッチングをしていた。

三球目、伝家の宝刀チェンジアップは打者のタイミングを外した。

打球はこいちゃんに向かって転がった。

「こいちゃん、ゲッツーや！」

僕はセカンドベースに向かって走った。

打球はこいちゃんのグラブに向かって吸い込まれた。

同じようなシーンが甦った。昨年の秋季大会での4 - 6 - 3の失敗！

いや、今回に限ってそれは無い。

こいちゃんはしっかりボールを捕るとクイックで二塁へと身体向けて投げた。

僕はそのボールを捕るべくいつものタイミングで行った。



何年このタイミング4・6・3を決めてきたか、絶対の自信をもっていた。

こいちゃんからのボールはまさに理想的場所に来て、それを僕は流れるように捕り一塁に投げた。

二塁塁審のコールが「アウト」を告げ、そして一塁手のグラブにボールが納まった。

「アウト！」

「ゲームセット！」

勝った、甲子園や！

僕達はマウンドに走った。ナインが斉藤を中心に重なり合った。

みんな口から喜びと興奮の言葉が溢れた。

スタンドの声援はまさに狂喜乱舞の声だった。

「やったあ、甲子園や！」

「勝ったで、俺ら勝ったんや！」

れんちゃんも斉藤もみんなが目に涙を浮かべていた。

最後の校歌を思いっきり歌って、僕達は応援団のスタンドへ向かった。

こいちゃんの号令で礼をした。

スタンドからは祝福の言葉が波のように押し寄せた。

中でも、山本くんの声は大きく僕達に聞こえていた。

ガッツで行こうのスタッフさん達も笑顔や泣き顔やでむちゃくちゃだったが、僕達の勝ちを心から祝福してくれた。

## 第16章 健全な男子

健全な男子？

決勝戦のあくる日、僕達はその実感をより噛み締めていた。

夏休みに入っているというのに、学校には大勢の人が忙しそうにしていた。

僕達も取材だなんだと分刻みで動かされていた。

「スポーツ新聞見たか？これはお宝になるで」

れんちゃんがうれしそうに新聞を見ていた。

そこには、美香石高校の甲子園決定の見出しと僕たちの写真が踊っていた。

ただ、その中には「こいちゃんも甲子園か？」

そう、まだクエスチョンマークだった。

結論を先延ばしにしてきた伏魔殿は追い込まれるに違いない。

県大会で敗退するだろうと高をくくっていたに違いない。

それが、優勝し甲子園出場を決めた。

おまけにこいちゃんは大活躍をしている。僕達はやれるだけの事は

全てやった。

この計画を始めた時から気持ちはまったく変わっていない。  
甲子園でこいちゃんと一緒に野球がしたい。

「うつちゃん、監督から甲子園までのスケジュールが出たけど、大忙しやで」

そういつとこいちゃんはスケジュール表を手渡した。

「すぐに甲子園練習やな、壮行会とかあるねんな」

甲子園までのスケジュールはかなりタイトだった。

練習もしなければいけないし、これは気を引き締めて行かないといけないと思った。

「おゝい、伏魔殿が結論出したらしいぞ？監督が集合しつろって」

そう言いながら、やまちゃんが息を切らせて走ってきた。

とうとう来たか！計画開始から11ヶ月、県大会出場は手にしたが甲子園の出場ははたして・・・

僕とこいちゃんは大急ぎで向かった。

グラウンドにはすでにみんなが集合していた。僕ら以外にガッツで行こうを初めとして、大勢のマスコミもいた。

僕はドキドキしていた。是か非か？

「今さつき連絡が入った。」

監督の顔をじっと見ていた。

「小泉の件だが、高校野球協定にしたがって甲子園出場は健全な男子以外は認めないとの判断がでた」

そこに居た全員が大きなため息をついた。

「どうしてなんですか？」

斉藤が怒り心頭の表情で監督に聞いた。

監督も苦虫を噛み潰した様な表情で答えた。

伏魔殿の回答は高校野球連盟の協定に元づき、プロ野球協約を参考に現時点では、健全な男子という項目を変更する事は難しいとの事。プロが変わらなければ、高校野球も変わらないというのが見解らしい。

県大会に関しては特例としてこいちゃんは認められたが、各県の規約があるので全国大会では無理だという結論にたっした。

悔しくて、悲しくて、どうしたらいいのかわからないくらいの怒りが沸いた。

その辺の何かに当り散らしたい気分をグット押さえ込んでいた。

れんちゃんもやまちゃんも斉藤もみんな同じ感情だったに違いない。

こいちゃんをそつと見た。

少し、残念そうな表情ではあったがしつかり前を向き監督の話を聞いていた。

「小泉、すまん！力不足で」

監督の言葉にこいちゃんが言った。

「ありがとうございます。皆さんのご好意は忘れません。公式戦に出れた事だけでもすつごくありがたい気持ちでいっぱいです。せつかく甲子園が決まったのに出れないは残念だけど・・・」

自分たちの無力さを痛感していた。

「みんなありがとう、甲子園はいっぱい応援するからここまできたら甲子園でも優勝目指してね」

こいちゃんの言葉に涙が出そうになった。

僕が勝手に計画して、やったことで多くに人を巻き込み、こいちゃんにもぬか喜びをさせてしまった。

蝉の鳴き声が久しぶりにうるさく感じた夏の午後だった。

甲子園

「うっちゃん、私の分まで頑張つてや」

「任しとき！打って、走ってかき回したる」

あの結論の後、大きな波紋も広がってかなりの反論、抗議など色々な事になった。

しかし、甲子園までの時間はあまりにも少なく、結論が覆ることは無かった。

こいちゃんはマネージャーとしてベンチに入る事になった。

僕達はこの息どつりを試合にぶつける事で解消しようとしていた。

一日でも長く、一試合でも多くこのメンバーで野球をやるうと誓いあった。

甲子園、高校球児の夢の舞台。5万6千人の観客の前で自分たちの高校三年間の全てをぶつける。

僕達の応援はひと際大きく、それは大きな力になった。

斉藤が投げ、僕達が打って守って、美香石らしい野球を繰り広げた。

僕たちは神がかりに試合を支配した。こいちゃんの分析データと元に相手打線を封じ込め、相手投手を打ち崩した。

僕自身も驚くほどの調子でヒットを量産し、盗塁も100%の確立で成功していた。

美香石高校は今大会の台風の目になっていた。

毎試合、途中でこいちゃんコールが起きるほど世間を見方につけた

僕達は、毎試合毎試合強くなっていた。

そして、予想だにできなかった決勝までやってきた。

甲子園は今までの野球人生でやっぱり最高の舞台だった。そこで何試合も出来た事は本当に幸せだった。

夏の暑さえ心地よく思えるほど、時より吹く浜風邪は気持ちを冷静にさせ、黒土の独特な匂いは気持ちを高揚させた。

この同じ思いをこいちゃんにもさせてあげたかった。

ベンチにこいちゃんが居るだけで、みんなに勇気がみなぎった。

僕達、美香石高校野球部はまれに見る一体感のあるチームになった。

あれもこれも、こいちゃんと一緒に甲子園で4 - 6 - 3のダブルプレーを決めたいと言う気持ちから始まった事だった。

結局はダメだったが、その恩恵は甲子園決勝の舞台に僕達が立った事だろうか？

「ゲームセット」

僕達の甲子園は終わりを告げた。

美香石高校は準優勝で今年の夏、いや三年生の夏を飾った。

負けた僕達に涙は無かった。高校野球をやっている生徒で一番長く野球をやれた。



伏魔殿に反旗をひるがえし、問題定義をした。たかだか高校生が仕掛けた計画は世間を巻き込み大きな社会問題になった。

たかだか野球、甲子園、男、女、そう思うかもしれない？

でも、その当事者は大人の気持ちとは違う気持ちなんだとわかってもらえたら幸いだとおもう。

野球、甲子園、チームメイト全てが最高だ。

## 第17章 紅葉と共に

紅葉と共に

甲子園の後、その功績から国体に出場させてもらった。またみんな  
で野球が出来て本当にうれしかった。

今年の国体は兵庫県だったこともあり、こいちゃんも出場できた。

今まで以上に楽しく野球を楽しめた。

美香石高校は優勝した。

「最後に凄いご褒美もらったね」

こいちゃんは最高の笑顔だった。

「11年間、一緒に野球が出来て僕は最高やったよ。最高のコンビ  
やったしな」

「うつちゃんには一番迷惑かけたね。こんなに長く一緒に出来るな  
んて思わなかったね」

お互いこれでもう一緒には出来ないとわかっていた。

僕達は野球部を引退する。

それぞれの道へと新しい挑戦をしていくのだ。

その年のドラフトで、わが美香石のエース斉藤はドラフト1位で在京の名門チームに指名された。

驚く事に、僕もドラフト3位で在京セ・リーグのチームに指名された。

あわよくばと思っていた僕は飛び上がって喜んだ。

他の仲間も大学から推薦の話が来ていた。

こいちゃんは大学やらアマチュアのチームからのオファーが多く来たが、これ以上の騒ぎは好ましくないと判断して、東京の大学を受験する事を決めていた。

その後、斉藤は球界を代表する投手になり、僕も3年目にショートのリギュラーを取った。

こいちゃんは大学卒業後、テレビ局に入って人気女子アナになっていた。

れんちゃんは大学NO1スラッガーに成長し、プロにやってきた。みんながああの時の諦めない気持ちで大切に成長していた。

1つの夢はみんなの目標になって、全てを変えた。

僕達は仲間の友情をしっている。

あの熱い夏の悔しさと喜び。

人生はまだまだ、いつでも何でも挑戦していける。

限界も諦めもそれは自分がどう思うかだ。

野球は最高の宝物。

「うつちゃん、私達人生でも二遊間のコンビを組まない?」

「こいちゃん以外の誰が僕と組むと思う」

仲間の祝福され11年間のコンビを超えるべく、人生のコンビを組む事になった。

いつまでも、二人は4 - 6 - 3のダブルプレーを完璧なタイミングと技で繰り返す為に・・・

今度はゲームセットのサイレンは鳴らない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8815d/>

---

4 - 6 - 3 (ヨン、ロク、サン)

2010年10月9日01時13分発行